

副題は「グローバル化と刑罰国家の到来」。米国のネオコン（新保守主義）は、福祉を切り捨て、貧困層を増やした。貧困率は欧州の2、3倍に達している。問題は、貧困を背景にした治安悪化を刑罰で管理する「刑罰国家」をつくったと言うのだ。

社会保障からの撤退と「刑罰国家」は有機的に関係すると主張し、これは欧州、南米にも上陸するなど

広がりを見せていると指摘する。警察官を増やし、落書き、公園でのごみ捨てなどの軽い罪でも罰していく徹底ぶりだ。選挙では「社会秩序の乱れの撲滅を固く決

意している」と有権者にアピールすれば票が獲得できる。貧困の原因を「自己責任」として黒人社会に押しつけ、社会保障、雇用安定の欠陥であることを覆い隠しているのだ。

（新曜社、2415円）



## 貧困という監獄

ロイック・ヴァカン・著  
森千香子、  
菊池恵介・訳

「刑罰国家」になったことで、刑務所の目的は変化し、囚人の社会復帰は放棄され、危険と見なされる集団を隔離して追い込むことが目的となった。

囚人数は200万人で、

この20年で5倍、国の監視下に置かれるのは黒人で5人に1人の割合。米国社会の暗部が読み取れる話題の書。19カ国で訳されている。